



TITLE:

附属図書館100周年：「『静脩』総目次」を読む(4)

AUTHOR(S):

松田, 博

CITATION:

松田, 博. 附属図書館100周年：「『静脩』総目次」を読む(4). 静脩
2000, 36(4): 12-15

ISSUE DATE:

2000-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/37564>

RIGHT:



登録番号 98084840

このデータベースの利用は今後、多方面に指向されよう。地域研究が重視される現在、『デル・リット・コレクション』に基づく南仏文化経済圏の歴史的研究(仮題)とも言うべき重要な研究のコーパスとなる。この資料は、200年間にわたる時の流れのなかで、南仏の歴史的・経済的・政治的・風俗的・文化的諸相に多様なアプローチを可能にする。歴史的には未知の多くの事実を提供し、経済的には特に18世紀における経済成長・物価の変遷、政治的には大革命期

以降の連邦・地方分権主義と中央集権主義の対立、風俗的文化的には、文化人類学・「民俗学」的分析を可能にし、さらには地域コミュニケーション論、フランス語地域語史・語彙・語法論・書簡文体論にも展望をあたえるであろう。

資料の解読・総合目録の作成と電算化に着手するには、多くの参考文献と機器、高度で緻密なマンパワーが必要であった。予算措置の実現のため多大のご配慮をいただいた関係各位、解読に協力された奈良女子大学大学院文学研究科博士課程井岡てるみ、京都大学大学院文学研究科博士課程辻川慶子・駒田登紀子・折井穂積・山田礼雄の諸氏に感謝し、またすでに現役を退いた私と附属図書館との仲介の労をとられ、数々の貴重な助言を惜しまれなかった吉田城氏に改めて深謝し、併せて今後のお力添えをお願い申し上げたい。

(すずき しょういちろう)

附属図書館百周年

「『静脩』総目次」を読む

附属図書館情報サービス課雑誌・特殊資料掛長 松田 博

展示会に目をやると、第1回が1900(明治33)年12月10日～11日に「附属図書館創立1周年記念展覧会」のテーマで開催されている。『静脩』には創刊の年1964年9月に開催された「ルーマニア図書展」以降の展示会記事が収録、紹介がなされている。一方、これとは別に部局毎、たとえば法科大学における1916(大正5)年2月13日の「マルサス生誕150年記念会展示」をはじめ、文学部、経済学部等で開催された展示会の内容が紀要等に収録、紹介がなされている。いずれにしても、これらをみていると、「テーマ」自体の重複も少なく、当時の担当者の工夫や努力、個性や創造性がひしひしと感じられるのである。附属図書館100年のこれまでの開催回数は、

掌握できるところで120回、『静脩』刊行後でも64回を数える。「貴重書展」、「維新展」をはじめ順を追って振り返ってみると、これまでのもので企画等規模が最大のものは1997年10月開催の「京都大学創立百周年記念展覧会 知的生産の伝統と未来」であり、また展示回数等異色なものは、「貴重書展」にたびたび登場し、それ自体の展示会でも1957年10月および1963年6月の2度にわたり開催されている「谷村文庫展」であるように思う。それだけにこの谷村文庫にまつわりそうな話題には興味がそそられる。そのひとつは谷村の収書姿勢についてであり、ふたつには藤本ビルブローカーと『国富論』をめぐることについてである。

谷村文庫については、「谷村文庫」(1)や『京都大学谷村文庫目録』(1963年)に詳しい。この『目録』の序文にもふれられているが、文庫の旧蔵者は藤本ビルブローカー銀行取締役会長であった谷村一太郎(秋邨)で、彼が“半世紀にわたって採集、愛蔵した和漢古書の集書で”“ほとんど和漢の稀覯書で満たされ、その豪華さ、潤沢さは氏の趣味の広さと、教養の高さを遺憾なく反映”する内容のものであった。猪苗代家の連歌集書、奈良朝写経、平安朝写経、鎌倉時代写経ほか、春日版、高野版、慶長・元和の古活字版等があり、特に五山版は内容的にも豊富であるとされている。これら谷村旧蔵書が、元附属図書館長新村出の進言を容れて京都大学に寄贈されたのは1942年のことであり、冊数は谷村愛蔵書のすべて9200余冊であった。翻って、この『目録』には和漢書とともに8点の洋書が見受けられるが、この冊数は和漢書に比し極端に少なく、すこし異なった印象を受ける。このことはむしろ、洋書についても関心のあったであろう谷村が、和漢書購入のために自重していたのではないかという思いを抱かせる。

谷村一太郎は1906(明治39)年10月16日、藤本ビルブローカーが株式会社として再発足する際、その発起人の一人として加わり、取締役に就任している。この藤本ビルブローカーは、藤本商店を先代から引き継いだ藤本清兵衛によって1902(明治35)年に設立され、無限責任の個人企業としてそれまで運営されていた。一方、藤本ビルブローカー銀行は、同じく藤本清兵衛によって1895(明治28)年に設立されているが、その後紆余曲折を経たこの銀行に1920(大正9)年7月28日、谷村は横田義夫とともに代表取締役に就任、1925(大正14)年10月12日には会長に就任している。この間、1919(大正8)年6月12日から12月17日の半年間を社員3名とともに外遊し、ニューヨークには4ヶ月間滞在している。

ところで、経済学部は、1919年に創設されてまもなくの1923(大正12)年6月5日に「アダム・スミス生誕200年記念会」を開催し、その一環

として展示会を尊攘堂で行っている。この展示会への出品には河上肇、本庄栄治郎等に混じって大平賢作、長崎高商武藤長蔵、東京商大高垣寅次郎等の名がみられ、機関についても附属図書館や文学部とともに同志社大学、大原社会問題研究所、藤本ビルブローカー銀行調査部等の名がみられる。これら出品に応じた機関の中にあつて、藤本ビルブローカー銀行調査部所蔵にかかるものは、スミス『国富論』初版をはじめとした洋書4点であった。

この大正12年という年は、先にみたように谷村が藤本ビルブローカー銀行の取締役就任等“社運の進展に挺身して会社興隆の基礎を築”き、昭和8年の引退に至るまで“輝かしい業績を残した”時期に相当している。またこの頃、自らが招聘した大山寿(京都帝大大学院で経済学を学び、榊田民蔵とも親交があった)が調査部部長に就任し、大山と二人三脚で調査部を飛躍的に発展させた時期でもあった。さらに、谷村は“経済学者海保青陵の遺著を探求して「青陵遺編集」を編纂し、あるいは「青陵陰陽談」のごとき経済学の専門的著述”を著し、『まびき』、『素駄架』等の専門的随筆を著したことにみられるように、経済学にもたいへん造詣が深かった。したがって、当時谷村が銀行調査部の資料収集に大きな影響力をもっていたと考えられ、そのなかで『国富論』を購入したとしても不思議ではないと思われるのである。このことは、“当時の藤本ビルブローカー銀行の調査部は、・・・その所蔵図書も第一次大戦後、谷村一太郎らの海外渡航後急速に増し『ロンドンエコノミスト』『ステイタス』その他海外経済雑誌のバックナンバーまで完備しており、・・・”との記録をみるにつけ、いっそうの思いを強くするのである。このようにみえてくると、谷村は洋の東西を問わず古典籍に対し見識をもっており、したがって関心を抱いた洋書は一体どのようなものであったのか、大山寿との関係も含めて興味はつきないのである。ただ、ここでは谷村がにもかかわらず自らは自制・自重していたのではないかと

いうことを繰り返すにとどめる。

次に『国富論』初版 1776年」の所蔵についてみておきたい。先の経済学部「スミス展」に、藤本ビルブローカ銀行調査部所蔵のものを含め『国富論』初版」が8部も出陳されたということ自体おどろきであるが、この8部以外に大原社研にもう1部、一橋大(メンガー文庫)、東大、慶応大、早稲田大、名大に各1部、個人では大西猪之助、尾高典作、高橋誠一郎、福田徳三、竹内謙二等に各1部の所蔵があったと思われる、また直後には東北大学および堀経夫が購入しており、初版が500部の発行部数であったことを考えると、当時日本の経済学にあってスミス受容はかなり高い位置にあったことがうかがえる。ここで、これら出陳された『国富論』8部のうち所蔵が現在と異なるものについてわかるところをふれると、大原社会問題研究所所蔵のものが大阪府立中央図書館(府立図書館天王寺分館、府立夕陽ヶ丘図書館を経て)に、武藤長蔵所蔵にかかる1部が長崎大学に、本庄栄治郎所蔵のものは松山大学に、河上肇所蔵のものは寿岳文章を通して関西学院大学に、それぞれ譲渡や寄贈がなされている。このうち関西学院大学を例にとると、所蔵や所蔵に至る経緯について一部割愛するが以下にみるような紹介がある。

- 1) アダム・スミスの会「アダム・スミスの著書(主要版次)全国所在一覧」『アダム・スミスの味』東京大学出版会(1965年6月)
- 2) 松田 寛「日本におけるアダム・スミスの原典ならびにその他の諸版本 1759-1900」『社会思想』3巻1号 社会思想社(1973年4月)
- 3) 田中敏弘「河上 肇と『国富論』」『KG Today(関学通信)』17号(1973年6月)[田中敏弘『アダム・スミスの周辺 経済思想史研究余摘』日本経済評論社(1985年2月)に再録]
- 4) 守矢 洋「スミス『国富論』初版の二つの異本について」『経済学雑誌』69巻5号 大阪市立大学経済学研究会 日本評論社(1973年11月)

- 5) 田中敏弘「『国富論』初版本と河上 肇博士の感想二章」『母校通信』51号(1974年4月)[田中敏弘『アダム・スミスの周辺 経済思想史研究余摘』日本経済評論社(1985年2月)に再録]
- 6) 宮本又次「河上謹一と河上 肇」『学会会報』第748号 学会(1980年7月)[宮本又次『先学追慕』思文閣出版(1982年12月)に再録]
- 7) 伊東光晴「本学の Adam Smith Collection について」『図書館の本 千葉大学附属図書館報』No.21.千葉大学附属図書館(1982年3月)
- 8) 松田 博「マルクス『資本論』初版の機関所蔵について 第16回西洋古典籍研究会報告(未定稿) 於:近畿大学(1993年1月23日)
- 9) 田中敏弘「特別展示資料紹介 アダム・スミス著作文庫を中心に」『経済学の成立 第3回大学図書館特別展示学術資料講演会』関西学院図書館(1993年10月)
- 10) 大村 泉「東北大学附属図書館所蔵マルクス/エンゲルス貴重書の周辺(下)」『木道子 東北大学附属図書館報』22巻1号(通巻78号) 東北大学附属図書館(1997年6月30日)[大村 泉『新MEGAと《資本論》の成立』八朔社(1998年4月)に再録]

これら所蔵目録や関連文献をとおしてみると、『国富論』はマルクスの『資本論』と並び現在では国内の多くの機関で所蔵されており、その数は合計で39機関、52部にのぼる。このあたりの事情については「東北大学附属図書館所蔵マルクス/エンゲルス貴重書の周辺(下)」(2)が参考になるが、所蔵機関については提供した資料の読み違いが見られるので訂正をおこない、またその後の調査により、新たに確認のできた金沢工業大学及び山崎怜先生のご指摘により確認のできた関東学院大学の2大学2部を加え、天理大学については2部から1部の所蔵に訂正し、以下に示しておく。

北海道大学、小樽商科大学、東北大学、一橋大学(6部)、東京経済大学(2部)、東京大学経済

学部、放送大学、慶応義塾大学(3部)、早稲田大学、法政大学大原社会問題研究所、中央大学、専修大学、日本大学(2部)、成城大学、明星大学(2部)、関東学院大学、名古屋大学経済学部(2部)、名古屋商科大学、金沢工業大学、京都大学経済学部(2部)、京都大学法学部、京都外国語大学、天理大学、大阪大学、大阪府立中央図書館、大阪市立大学、関西大学、近畿大学、大阪商業大学、阪南大学、大阪学院大学、神戸大学、神戸商科大学、関西学院大学(2部)、福山大学、広島経済大学、松山大学、九州大学、長崎大学。

その後“京都大学に入った”(これは、谷村が藤本ビルブローカー銀行を退く際、退職記念品として「日富論」を祈願したというエピソードと谷村蔵書が京都大学に入ったということの混

同、思い違いに基づく記録のようである)とされる藤本ビルブローカー銀行調査部所蔵のデュガルド・スチュアート旧蔵本は、京都大学にはなく、一体どこに入ったのであろうか。

展示会を起点の話が広がりすぎたが、以上を紹介しておきたい。

1: 笹本 光代「谷村文庫」『静脩』

Vol.20. No.1.(1983年10月)

2: 大村 泉「東北大学附属図書館所蔵マルクス/エンゲルス貴重書の周辺(下)」『木這子—東北大学附属図書館報—』22巻1号(通巻78号)
東北大学附属図書館(1997年6月30日)

(まつだ ひろし)

附属図書館百周年 自立・共同・発展のイニシアチブ 京都大学図書館システムの新展開へ

附属図書館情報サービス課図書館専門員 澤 居 紀 充

二つの要請

明治維新、戦後改革に次ぐ第3の改革といわれる「行政改革」は、経済、金融、社会保障、財政、教育、行政の6つの分野におよび、国立大学と大学図書館の存立基盤を大きく変えようとしている。これが大学における教育と研究、大学図書館の発展となるかどうか。少なくとも今現れている予算の削減または「重点配分」と定員の大幅削減という動きをみると、大学図書館受難の時代といっても過言ではない。

このいわば「難局」を切り抜けるためにさまざまな課題が提起され、従来の大学行政からみると、相当大胆な改革も行われようとしている。

他方、大学図書館に対する利用者の要求も強まり、情報と文献の入手における国際的な水準からの遅れを日常的に体験した利用者からは、怒りの声も図書館にぶつけられて来ている。こ

れは大学内外における教育と研究、生涯教育などの深化・拡大にもとづくものであろう。

これら二つの要請に対して、われわれ図書館と図書館職員はどんな態度をとればよいのだろうか。

利用者の要求と図書館の発展

われわれの基本的態度は以下のようでありたい。すなわち利用者とともに利用者の要求実現へ努力すること。利用者の要求を身勝手なものとしてだけ見たり、感情的なものとして排したりせず、図書館職員の専門性を発揮して、その要求実現の方途を考えなければならないと思う。当面の困難な諸条件にひるんで、その実現を初めからあきらめていては、図書館の存立の基盤そのものを掘り崩すことになる。そして利用者の要求は発展し、それに積極的に応える努力を通じて図書館も発展する。